さらば死神よ

田中阿里子

人文書院

田中阿里子

さらば死神

人文書院

著者略歴

田中阿里子（たなか・ありこ）

1921年生れ。1943年日本電池社員としてジャワに赴任し、三年後に帰還す。退社後放送作家を経て小説に志す。1960年第三回婦人公論女流新人賞を受賞。著書に『闇の中の対話』『終らない喜劇』『秋艶記』『猪名の笹原かぜ吹けば』『悲歌大伴家持』（以上、講談社）『源氏物語の舞台』（徳間文庫）などがある。

さらば死神よ

一九八九年六月一五日初版第一刷印刷
一九八九年六月二五日初版第一刷発行

著　者　田中阿里子
発行者　渡辺睦久
発行所　人文書院
京都市下京区仏光寺高倉西
電話・〇七五-三五一-三三九一
振替・京都〇-一一〇三

印刷　株式会社太洋社
製本　坂井製本所

©Ariko Tanaka, Printed in Japan, 1989.
落丁、乱丁本はお取替え致します

ISBN4-409-15015-4　C0093

目次

月を抱く……5
午前二時の花……39
巨きな樹……89
いつか芬蘭へ……131
牙がほしい……193
さらば死神よ……233
あとがき……287

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

さらば死神よ

田中阿里子短編集

月を抱く

(一)

習字をならいにきている子供達が帰ったあとで、板敷の部屋を掃除していたエリカは、書きつぶしの半紙などと一緒に、四つ折りの新聞紙を拾った。生徒が新しい用紙の包装用に使っていたとみえて、おおかたボロに近い。日付をみるともう三ケ月も経っている。屑類とあわせて焼きすてる積りで、裏庭の焼却器の方へ歩いた。途中で新聞をひろげて、他のゴミを包みこもうとしたが、社会面の隅の方に、「カヌー流れつく」という見出しをみつけて、その記事に吸いよせられた。胸の動悸を押えながらその記事を何遍か読んだ。しかし川岸にうち上げられた半壊のカヌーの内部に記してあった名前が、「緑川晃」に間違いないことを悟ると、その新聞をもって裏庭に廻った。すでに体中の力がぬけたように足許がふらついている。でも記事の内容はすっかり頭の中に印刷されて、二度と消せない状態になっているので、汚れた新聞に火をつけると、焼却器の中に放りこんだ。紙と木の葉の焼ける匂いが鬱陶しくひろがった。

記事によると、カヌーのうち上げられた場所からずっと下流の、十津川と北山川の合流点で、緑

川の死体は発見されたそうである。その前日に二津野（ふたつの）ダムの下方から、連日の雨で増水した川の中へ、無理にカヌーを出した男の姿を見た人があるという。無謀というか、まるで自殺行為だとの、近隣の人の意見もそえられていた。

エリカは呆然と縁に坐り続けていた。気がつくとすでに昏れていた筈の眼前の林が、また薄白く明るんでいる。どうやら夕方から空を掩っていた雲が切れて月があらわれ、その光りが林の上にふりこぼれているらしい。みていると白い闇の中からこちらに向って、緑川の影が歩いてきたので、彼女は思わず眼をつむった。両手で顔を掩ったまま部屋の中にかけこむと、暗がりの中で泣きはじめた。涙があとからあとから流れてとまらないのだ。どのくらい泣き続けたのか、月光はまた雲にかくれて辺りは真っ暗になった。

(二)

エリカが勤め先の帰途に、繁華な河原町通から少し東へ入った道を歩いていて、「緑川晃水彩画展」という貼り紙をみつけたのは、六、七年も前のことであった。何げなく店に入ると、奥の方に一人の男がすわって、手許のラジカセから絃楽四重奏の曲をきいていた。男の年齢は四十代の後半とみえたが、客を無視してじっと音にききいっているその顔に、亡父の面ざしを認めたエリカは、急いで視線をそらして作品の方へ歩いて行った。

作品はすべて水彩画の小品で、琵琶湖の周辺の景色を描いたものであった。だがそれは普通の写

生画ではなくて、全体が青や緑で統一された半抽象のものである。気になるのはどの作品にもごく少しのオレンジ系統の色が使ってあって、それは月であったりポストであったり、女の唇を連想させる形であったりする。中には小型の舟もあった。エリカはそのオレンジ色が変に気になって、作者の心のどこから出てくるものだろうという疑問から、椅子に坐っている男の方を振り返った。それと同時に男も正面からエリカを見据えたが、意外にも表情は全く父と違っていた。彼女はかえって安心をおぼえて思わずお辞儀をすると、男も急に優しい顔つきになった。

「まあ、かけませんか。店の人が帰ってきたらすぐにお茶を出させますから」

「はい、でも六時には家へ戻る予定ですの。それからまた行く処がありまして、折角ですが時間がありません」

「時間がない、時間がないってそんな、せっかちな兎のいうようなせりふ、いわないで下さいよ」

「え、兎ですって？」

「時計をチョッキのポケットから出して、〝あ、大変だおくれてしまう！〟って叫ぶ兎ね」

「ああ、不思議の国のアリスの……。でも会社員はどうしても時間に縛られますわ」

「あなたはまだ若いからすることがいっぱいあるのでしょうね。でも僕ぐらいの年になると、物事は結局、やってもやらなくても同じだってことが分りますよ」

「そうですか、じゃどうして？」

エリカは彼の絵の並んでいる方へ眼をむけた。

「これをかいたというのですか。まあね、あり余る時間をつぶすためにやった仕事で、気がついた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ら三十点になっていたというだけです」
「気がついたら……そうすると努力もしないで得られた実績なのですね、これは」
「ハハ、努力ね。全くしなかったわけじゃないですよ」
だがエリカはその画が素人くさくはありながら、どこかに作者の天分を感じさせる点があるのを、羨やましく思いながら見直した。男は珍しそうにエリカの感嘆ぶりをみていたが、
「ほめて戴いたことは忘れませんよ、決して。じゃ署名だけはしておいて下さいね」
と、年長者らしく余裕のある態度で帖面をさし出した。
当時、エリカはあせっていた。入社して五年にもなるのに主任の試験におちてしまい、会社での立場に行きづまりを感じていた。だから何か一つの特技がほしくて、エレクトーンを習っている最中だった。だが思うように等級が上らずに、悩んでいたのだ。八級からはじめて五級ぐらいまでは、さほど苦労もなかったが、そこから先は作曲の点数が悪かった。それで自分にはものを創る能力がないのだという悲観的な思いや、音楽は困難だがほかのもの――たとえば書道ならばいけるかもしれないなどと、そんな迷いの中でくらげのように漂っていた。緑川晃の小さな個展に足をとめたのも、くらげが波にうちよせられて岸に上っただけのことで、絵に対する知識も教養も持ち合わせていなかった。けれどもその店に並べられた小品の中に、自分をみちびく先験的な何かがあるのを認めた。それはエリカに恵まれた一つの感受力だった。
日が経つにつれて、絵の印象は鮮やかにエリカによみがえった。青色の中に沈む、ほうずきほどのオレンジ色が、灯になってエリカの胸の中にともると、不思議に彼女は自信をもつようになった。

何か緑川が、遠くからエリカを声援しているように感じたのだ。それで次のグレードがきまる時には、曲がよいといってはじめて教師にほめられた。

「頑張って先生の資格をとるまで続けましょうか」

「やってごらん。見込はありますよ」

いわれて調子づいたエリカは、エレクトーンだけでなく、書道の塾へも通い出した。教育書道といって、これも努力をすれば意外に早く、小学生相手の教室を開ける程度になると、知人に聞いたからだった。二つの勉強をすると、それこそ兎のように、時間がない、時間がないととび廻る忙しさだったが、峠を越えれば会社をやめて教師業に移り、今より自由な境涯を得られると信じた。緑川が、「これはあり余る時間をつぶしたもので——」といった以上は、彼は働かないでも食べていける結構な身分なのだろう。だがエリカには親の残した家があるというだけで、ほかは何もなかった。幸いに家が広いから、改造して教室をこしらえ、書道やエレクトーンを教えるようになれば、気の向かない会社員生活から逃げられる——そう思った。ちょうど八年前に両親が東京から移ってきて、まもなく事故でなくなってから、ひとりで高校を卒業して、下京区の会社に就職し、働き続けてきたこの何年もの暮しと別れて、気ままに自宅で暮すことが、エリカの夢であった。

不本意な勤め人の生活からぬけ出すには、結婚という方法もあって、それを考えないでもなかった。だが、緑川に会ってからのエリカは、急に方針が変って、それまでつき合ってきた田村という、会社の同僚との関係も、本気で続けていく気持をなくして行った。田村は仕事には几帳面であるし遅刻もしない。上役や同僚達とのつき合いもよくて、敵をつくらないという性格である。家は商家

でその次男だから身軽だし、一生を預けても構わないと思ってきたのである。けれどもその田村に、エリカははじめてデートのことわりをいった。すると田村が驚いて、理由をいってほしいと電話でなじった。エリカは自分の心の変化がまだ自覚出来ない程だったが、

「一人の時間がほしいのよ、今夜は」

と、そう素気なく答えた。

「つまり僕と一緒にいるのがいやになったんだね」

「いいえ。でもたまには習慣から離れたいってことがあるでしょう、人間には」

「僕にはないよ」

田村は不機嫌に電話を切ってしまったが、夜おそくにまた電話をしてきた。深酒をしているらしい声で、

「女には男に遠慮したい日が、月に一度はあるってことを忘れていたよ、じゃおやすみ」

と言ったのだ。彼の不作法な言葉にエリカは思わず罵言をいいたくなったが、我慢しておやすみをいった。彼と結婚したら、こういう行き違いが少しずつふえて、押えようもなくふくらんでしまうだろうという予感がした。それで、次の土曜日もまた逢うことを拒んだ。

三回目の土曜日には、田村がことわりもなくエリカの家に来た。彼女は仕方なしに招じ上げたが、

「悪いけど当分の間、結婚は延期したいの」

と告げた。

「何故？　理由がはっきりしないうちは承知出来ないよ」

「結婚するまでにもっと色々身につけたいことがあって――家にいても自分の小遣い程度は稼ぎたいもの」
本当は独り立ちがしたいという本心をエリカはかくした。
「僕の給料でやっていける筈だがな」
田村は待たされるのを不足そうに言ったが、それ以上はひどい反対をしなかった。彼の方も今までの無責任なつき合い方になれて、それなりの気楽さを認めたのだろう。束縛されないときまると、かえってエリカも田村の訪問をゆるすようになった。やはり自分の歩きたい道の邪魔をしない程度のつき合いは、家族のないエリカにとって必要だった。幸いに家は糺(ただす)の森の西の外れにあって、隣りは二軒とも老夫婦が住んでいる家である。夜中に誰が出入りをしても、何の文句も噂もたたない環境だった。
緑川がエリカの胸に残した朱の一点は、まだ鮮やかに生き続けていて、彼女を鼓舞した。その朱が霊気となって、裏の林の梢をとび廻る情景を頭にうかべながら「舞踏」と題する曲をつくり上げた。そしてエリカは試験に挑戦し、次のグレードに進んだ。書道の方も岡崎公園の近くに師匠をみつけて通ったが、その師がエリカの墨色にそえてくれる朱筆も、彼女の心をたかぶらせた。習字は上手だと以前から会社でもいわれていたので、正式に習い出すと上達は意外に早く、エレクトーンより先に、収入につながりそうに思えてきた。
エリカは会社をやめる日の近いのを数えながら、しかし田村とはまだつき合っていた。何といっても田村はエリカの体を知りつくしていて、楽器を微妙に弾くように、エリカの感覚を刺戟した。

昼間はエレクトーンの音のハーモニーの中にとけこんでいるエリカが、夜に田村がくると、自分がエレクトーンになってしまったように感じた。

エリカは自分に心の目標をあたえてくれた、緑川の個展を思い出すと、その作者に逢いたいと思う日が何度かあった。だが作者よりも、作品にうがたれた朱の一点に何時までもこだわっていたから、緑川晃という現実の男性に、面倒な手続きを経てまでも逢おうという情熱は湧かなかった。ひとつには生きている男とぶつかって個性のもつれ合う戦いをしたり、夢がさめて落胆したりすることがこわかったので、幻の中のひととして大切にしながら、三年ほどを過した。一度だけ、勤めの帰り途にいつかの店の前を通りかかった時、店の主人らしい人がいたのでひかれて入り、緑川の個展の話をしたことがある。彼の住所を知らないかときくと、

「それが変った方でして、住所は大津市というだけでくわしいことは言われなかったですよ。お金は前金で貰ったし、それ以上つきとめる必要もこちらにはなかったんです。この世界には変った人が多いので、別に気にとめませんでしたが、あなたは何か？」

主人はかえってエリカを怪しむ風にきく。急いで返答をごまかして店を出た彼女は、以後は一層、緑川の所在をたしかめようという努力を怠った。

ある日曜日の朝、食前に新聞をひろげてみていたエリカは、俳句の投稿欄の二席に、緑川晃の名をみとめて息をのんだ。

花万朶（まんだ）　空（くう）となりしが鉦（かね）の音

とある。名前と作品をみただけで、選評にも気がゆかぬエリカは、九時になるのを待ちかねて新

聞社に電話をした。日曜にもかかわらず、読者係というのが出てきて、今日は駄目だが、明日ならば担当者がくるから、住所は調べてみるという。ついでに投稿の整理をしている者の名も教えてくれた。時間の経つのが待ち遠しくて、その日は何をしていても心は宙を舞った。

投稿係が教えてくれた住所と名前をメモに書いて、改めて眺めた。手紙を書こうかと思ったが、彼の本名が知りたいので、先に滋賀県の電話帖を繰った。緑川晃の名がそのまま出ていて、一層の興奮をおぼえた。すぐにも電話をかけたかったが、留守だといやだから昼食の頃にきめた。いよいよダイヤルを廻すと、男の声が出た。覚えているツヤのある声だ。自分の不躾をくり返しわびながら、個展の時の想い出を語って、一度お目にかかりたいと言った。相手はしばらく考えて、

「中川エリカさん……そうでしたね、たしか」

と答えたが、

「今は父の病気が重態で手が放せません。何時か連絡しますよ」

そういうので、あわててこちらの番号をつげると、電話はそれで切れた。

緑川の番号を護符のように財布にしまいこんだまま、エリカは毎日が落着かなかった。十日経ち、二十日経ったが、こちらから積極的に、「御父上の容態は」とたずねる勇気も出て来ない。また一月が経ち、二月が経っても消息がなく、無関心な相手とわかりながら、急に執着しだした自分に腹が立った。田村との結婚にふみ切れなかったのも、無意識のうちに緑川の存在があったせいだと思う。しかしこういう空しい時間のうちに、唯一の救いになるのは、緑川には賑やかな家庭の雰囲気がないらしいことである。普通ならば重態の人の看護に、緑川の妻が立ち働いている筈なのに、電

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com